津波と世界記憶遺産
～再び岩手県大槌町へ⑫～

先日、富士山が日本で十七番目の世界遺産に登録された。ほぼ時を同じくして「慶長遣欧使節資料」と「御堂関白記」が世界記憶遺産に登録された。

世界遺産の富士山に比べ、世界記憶遺産の方はメディアの扱いが極めて小さい。そもそも私は世界記憶遺産なるものを知らなかった。調べてみると、世界遺産は一九七二年のユネスコ総会で世界遺産条約が採択され、遺跡、景観、自然など人類が共有して保存すべきものを登録する。

一方、世界記憶遺産は世界遺産より遅れること二十五年、一九九七年に同じくユネスコが実施を決定したもので、歴史的な文書・絵画・音楽などの保存と振興を目的とする。

今年は慶長使節派遣から四百年

日本では二〇一一年の「山本作兵衛炭坑記録画・記録文書」が初めてで、今回の二件を加え三件しかなく、世界記憶遺産への関心は薄く、知名度も低い。

ところで、大槌町からの帰りの東北新幹線の車中で持ち帰り自由の冊子「トランヴェール」に「伊達政宗、慶長使節四百年の謎」なる特集があった。今回、その資料が世界記憶遺産に登録された慶長使節は、奥州王・伊達政宗の命を受け、支倉常長らが慶長十八年（一六一三年）月浦（現在の石巻）を出航し、メキシコ経由でヨーロッパに向かって今年で四百年になる。

周囲に誰も住んでいない道路沿いの仮設食堂「おらが大槌復興食堂」の前で山口天使幼稚園の先生たち

三陸沿岸の津波災害はきちんと資料が残っているものだけで五件あり、一六一一年の慶長三陸津波はその一つである。

慶長三陸津波は慶長遣欧使節が出発する二年前に発生し、千七百人以上の死者が出るなど伊達政宗の仙台藩は大きな打撃を受けた。

宮城県慶長使節船ミュージアム館長の濱田直嗣氏は「伊達政宗が二年前の慶長大津波で甚大な被害を受けながら慶長使節を実施したのは、これが津波被害復興プロジェクトだったからだと思われる」と「トランヴェール」に書いている。

私はこの指摘に引きつけられた。使節団は七年という長い歳月を経て、一六一〇年に日本に帰った。しかしそれより六年前の一六一四年に徳川家康は全国にキリスト教禁止令を出し、鎖国政策をとったため、使節団の使命は徒労に終わった。

政宗の使節派遣により、メキシコと交易してその利益で災害からの復興に役立てるという夢は実現しなかったのである。しかし大きな天災にもかかわらず、それに屈せず外国に目を向けて活路を開こうとした政宗に引きつけられる。

東北へのボランティアは今回で最後として「東北の皆さん、頑張って」という気持ちを込めて釜石駅で「がんばろう東北」とプリントされたTシャツを買った。しかし新幹線の中で政宗の記事を読みながら、東北の被災者に頑張ってと言うだけでなく、亡くなった二万人を超える人々の霊に応えるためにも震災から学ぶべき本質的な問題があるのではと思い始める。

そのためにも八月の夏休みにもう一度大槌を訪ね、一人の日本人として震災から何を学ぶべきかを考えてみたい。

このスローガンが
何か他人ごとのように…